

Case1

地域の暮らしと向き合う

独り暮らし高齢者見守り会 (三ツ石町8、9班)



松川公三さん

三ツ石は高齢化率が48%と高く、4軒に1軒は単身世帯で、今後単身世帯は増加する見込みとなっています。こうしたなか、地域の中で高齢者が孤独死するという痛ましい出来事が起きました。「日ごろから気に掛けていただけに、やるせないし気の毒」と、いつも声を掛けていた松川公三さんは話します。

住民でできることは 自ら取り組む

さらに災害時の避難を考え、支援できる人を増やそうと、近隣の2班で組織的に取り組むことにしました。11月1日、住民説明会を開催し「災害時の対応」と「独り暮らし高齢者見守り活動」について提案し、意見を交わしました。

見守り会の代表となった松田恵以子さんは、災害対応マニュアルの作成にも精力的に取り組みました。看護師や医療専門学校講師としての経験を生かしつつ、図書館にも通い情報を集めました。

「避難は長靴より運動靴のほうが動きやすいよ」と説明しながら、完成したマニュアルには、避難時の持出品や救急車の呼び方などが高齢者の目線で分かりやすく書き込まれています。

三ツ石町は、これまでも筋トレ教室や乗合タクシーなど、行政と連携して地域課題の解決に取り組んできました。「全てを行政に委ねては継続できなくなる。住民でできることは自ら取り組み、行政がサポートすることで効果も大きくなる」と松川さん。



松田恵以子さん

参加者からは「どのような成果になるかわからないが、とにかくやってみることが大切」、「この取り組みが近所同士のネットワークを作るきっかけになればと思う」という感想が聞かれました。

目の前の課題と向き合い、地域のために地域で取り組む姿勢は、これからのまちづくりのあり方をはっきりと指し示しています。

市では、「住みたい、住んでよかったと感じるまち」の実現に向け、まちづくり推進のための6つの基本目標を定め、さまざまな事業に取り組んでいます。

まちづくりを推進していくのは、人の思いと実行力。そのため「自分たちのまちは自分たちでつくる」という市民自治を基本理念としており、市民と行政との協働を推進しています。

今回の特集では、さまざまな協働の事例を紹介するとともに、関係者の思いや専門家の意見を取材しました。



Case3

地域からまちを楽しく

パインコーンズ

PiNECoNeS



魅力あふれるパインコーンズのメンバーたち。

松ヶ原町の雑貨カフェ「アップヒル」内に事務局を置くパインコーンズ。メンバーは6人全員が女性です。彼女たちの活動のコンセプトは、女子目線によるまちづくり。これまで、そのコンセプトのもと数多くの活動を繰り広げてきました。中でも、大竹市にゆかりのある作家にこだわったクラフト市「デアイマルシェ2013」では、行政が参加者となってイベントの盛り上げに「役立つ」という新しい協働事業の形でした。イベントは彼女たちパインコーンズによって、自主的に運営され、行政は関わっていません。

このまちで楽しいことをやりたい

このような協働のカタチは、パインコーンズにとっては、どうだったのでしょか。その問いに、パインコーンズ代表の藤井ちえさんは「私たちは、自分たちが心から『楽しい』と思い、同世代の方たちが喜んでくれることをイメージしてやってきました。だから行政に頼ろうとは思いませんでした。今後一緒にいうとしても、私たちのコンセプトは大切にしていきたいと思えます。デアイマルシェでは、縁があつて市職員の方と協働する形になりました。私たちのイベントに市が参加してくれ

たことは、正直なところ驚きでした。私たちのコンセプトを市職員の方がとてもよく理解してくださり、柔軟に対応してくれたことに感謝しています」と笑顔。「私たちは、このまちで楽しいことがしたいの思



デアイマルシェでの取り組みに 県から大竹市に盾を授与

11月14日、中国新聞ホールで自治体の住民サービス向上に挑戦する優れた取り組み事例を紹介するチャレンジフォーラムが県主催で行われました。各自治体から52の取り組み事例の応募があり、市はデアイマルシェで行った学校用品のリサイクル市の取り組み事例を応募。当日発表の5事例に選ばれ、盾が授与されました。

ちが楽しく活動していれば、市外に出た大竹市出身者たちも戻ってきたり、大竹に遊びに行こうと思ったりする人も増えると思います。これからも、人と人のつながりを大切に、大竹市を盛り上げていきたいと思えます」と今後の活動への意気込みも話してくれました。

市民がやりたいと感じているまちづくりに、行政が連携できる部分を見出し、行政が成功に導くヒントが隠されているのではないのでしょうか。

Case2

学校・地域が連携したまちづくり

玖波スクラム



(上) 平成24年、草が生えただけの空き地が、きれいな花を咲かせるスクラム広場に生まれ変わった。(右) 今年の春、小・中学生が一緒に行ったスクラム広場での花植え。(下右) 学校に地域の人たちを招いて開催されているスクラムフェスティバル。子どもも大人も笑顔があふれた。(下右) 地域と児童生徒が作った地域安全マップ。地域との関わり合いの大切さなど多くのことを学んだ。



JR玖波駅からコミュニティサロン玖波方面に歩いていくと見えてくる「スクラム広場」。この広場は、玖波小学校の児童、玖波中学校の生徒、そして地域の人が一緒に作って作り上げたもの。花壇には、季節によって色とりどりの花が咲き、まちを明るく彩っています。平成24年から始まった玖波スクラム。学校、地域がスクラムを組んで、子どもたちの心を豊かにして一緒にまちを良くしていこうと取り組んでい

多くのつながりが心を元気にし、まちを明るくする

最初の取り組みは、空き地を花いっぱいの花壇がある広場に改造する「スクラム広場づくり」。花壇の設計は中学生が行い、小・中学生が協力して草取りから始め、地域の人や企業の協力のもとに広場が完成しました。「子どもたちが社会や自然・環境との関わりを持つことで、達成感や自己の成長を実感するなど、多くのことを学んでいるようです」と玖波中学校の豊原芳史校長。現在も、年2回花を植えたり、花壇の草取りをみんなで رفتりして活動

を継続しています。「平成24年に始まった玖波スクラムも今では、さまざまな活動に広がりをみせています。今では活動を通して学校と地域、そして地元の企業とのつながりが深まっているのを実感しています」と話すのは玖波小学校の池上宏校長。現在は、スクラム広場のほかに、駅前フラワールoadの花植えや、地域の安全マップ作り、スクラムフェスティバル、公民館でのイベント参加など、地域や地元企業を巻き込んだ活動が多方面に広がっています。

中学生が地域や小学生から学び、小学生が地域や中学生から学び、そして地域が子どもたちから学ぶ。この相乗効果がまちと携わる人の心に元気を与えています。

学校の授業の枠を越え、放課後も地域活動に参加する子どもたちもできて、「地域とつながりが深まったからこそできることだと思えます」と豊原校長は効果を実感。また、池上校長も「まちで出会ってもお互いが元気な挨拶を交わすことも増えました」と話すように、人と人とのつながりを通して地域全体が明るく元気になっているようです。

人と人とのつながりを通じた元気な地域づくり。これも協働のカタチのひとつではないのでしょうか。



よいまちづくりには、住民と行政だけではなく多様な住民同士の協働も必要

規模縮小に高齢化活動が難しくなる場合も
組織率が低下すると、自治会の規模が小さくなり、高齢化も合わさって、活動ができなくなる場合もあるようです。
活動が縮小してくると地域内での人と人のつながりも弱くなります。近年、孤独死などの問題が起きていますが、地域住民が気づけないという原因の一つには、そのようなことが

住民と行政の協働で住民サービスの質を向上
近年、全国的に協働という言葉が、盛んに使われるようになってきました。理由の一つには、少子高齢化により、今まで通りの行政サービスが行えなくなってきたことがあるのではないのでしょうか。
しかし、一番大切なことは、地域課題や住民サービスを住民と行政が協

多様な住民同士が協働できる取り組みも必要
無償のボランティアの精神は、大事なことです。活動を継続的に行っていくためには、資金が必要なることを理解することも重要になってきます。支援の方法は、何にでも使えるように括で資金を交付する形や、住民が提案する地域課題の解決に必要な資金を提供する形などさまざまです。行政には協働への意識醸成だけではなく、住民のやる気が「形」になる仕組みづくりを整えることも必要だと思えます。
大竹市の8割を超える自治会の組織率は、全国的にも高い水準で、これからのまちづくりのための資源に恵まれています。また、公民館活動や市民提案事業などを見ると、新たなまちづくりに取り組む人や団体が、芽を出してきている状況であり期待が持てます。
これからは、行政と住民だけではなく、これらの個性の異なる住民と住民の協働もコーディネートし活動を充実させていく取り組みが、必要になってくるのではないかと思います。

自治会活動を通じてコミュニケーションを築いていきたい

最も身近な住民組織である自治会。その地域に根差したまちづくりの活動には、多くの市民が関わってきました。自治会連合会会長の岡野俊彦さんに、自治会の取り組みについて伺いました。



現在、市内には71の単位自治会があります。規模により状況は異なりますが、福祉、防犯など幅広い分野で、それぞれ工夫して活動しています。

いつも感じるのですが、大切なのは活動を通じて市民同士のコミュニケーションが図れること。これに尽きると思います。例えば、「とんど」をすれば竹を切る準備をしながら会話が生まれ、「餅つき」をすれば、子どもも親も年配の方から作り方を教わります。

人と人が関わり合う場があることで、世代を越えた人の輪が広がっていきます。そのつながりが、本当に困ったとき、お互いに助け合うことができる関係を築いていくのだと思います。

ます。

一方で活動するうえで担い手不足という大きな課題も抱えています。難しい面もありますが、活動の中から後継者を育成する仕組みが必要だと感じています。

また、市民と行政との橋渡しも自治会の大きな役割です。災害時の自主防災活動にしても、まずは「自分の身は自分で守る」という意識が大切です。お互いの連携が円滑にできれば情報の共有や対応の迅速化ができると思います。

市民と行政が、それぞれの立場で役割を果たしながら「まちづくり」を進めていけば多くの方が幸せを実感できる大竹市が実現できるのではないのでしょうか。

一緒によいまちづくりに取り組んでいきましょう

市民自治の推進を総括する自治振興課の吉田茂文課長に、協働への取り組みについて伺いました。



「よいまち」をつくりたいと思う市民と行政が協働することで、さまざまな地域課題に対して、より市民のニーズを反映した解決ができると考えます。

そこで前期基本計画では、市民の皆さんのまちづくり意識を高めていただくため、地域活動や市民活動に対する支援を行う一方で、市職員も協働に対する認識を深めるため職員研修を行っています。
市民の皆さんと職員のお互いが協働のまちづくりに対する意識を高めたい中で、「自分たちのまちは自分

関係しているのではないのでしょうか。
自治会とNPO団体などの連携が大切に
自治会は、歴史が長く地域に根差した全般的なまちづくりに携わってきた基礎的な組織です。今後のまちづくりにおいても欠くことのできない住民組織だと思えます。
一方、地域に刺激を与えるためにはNPOなどの団体の新しいアイデアや活力も必要です。両者の連携が大切なことだと思えます。
自治会やNPOのどちらも、まちづくりに取り組む点では共通しています。取り組み方や内容がそれぞれ違う個性ある組織です。この両者が連携できるようにしていくためには、団体それぞれの実情をよく理解し、コーディネートできる人材の育成やしくみづくりが必要だと思えます。

「よいまち」づくりに取り組んでいくことが大切です。
昨年から今年にかけて市制施行60周年記念事業として、市民の皆さんから提案していただいた「市民提案事業」と職員が協働して実施する「職員協働事業」に取り組みました。これら数多くの協働事業は、市民の皆さんと信頼関係を築き、お互いの役割を明確にしながら、まちづくりに取り組むというまさに「協働のまちづくり」の事業だったと思います。
これを契機にして、市民と行政との協働に向け、次の段階に進んでいく必要があると考えています。一緒に「よいまち」づくりに取り組んでいきましょう。

「よいまち」づくりに取り組んでいくことが大切です。
昨年から今年にかけて市制施行60周年記念事業として、市民の皆さんから提案していただいた「市民提案事業」と職員が協働して実施する「職員協働事業」に取り組みました。これら数多くの協働事業は、市民の皆さんと信頼関係を築き、お互いの役割を明確にしながら、まちづくりに取り組むというまさに「協働のまちづくり」の事業だったと思います。
これを契機にして、市民と行政との協働に向け、次の段階に進んでいく必要があると考えています。一緒に「よいまち」づくりに取り組んでいきましょう。

市制施行60周年

市民提案事業紹介

(10月までに実施したもの)

市制施行60周年を契機に、「よいまち」の実現に向けて、市民の皆さんから提案してもらった「市民提案事業」。市民と行政が協働して取り組んだ、この事業をきっかけに今後も続いていく取り組みもあります。まちづくりは思いと実行力。これを機会に、皆さんもまちづくりに一緒に取り組んでみませんか。

大竹駅前音楽喫茶(Oh!バンパー倶楽部)
市内および近隣の演奏者による、大竹駅前の空店舗などを会場にしたライブの開催。市制施行60周年記念のイメージソングの制作。



ダンボールコンポスト利用による大竹市の家庭ゴミの減量提案(えこらいふ大竹)
モニターにダンボールコンポスト基材を提供し、生ゴミ減量の効果を測定。小方小学校4年生も環境学習の一環として実施。



ふるさと大竹再発見◇わたしのおおたけみつた◇フォトコンテスト(大竹観光協会)
「大竹の魅力再発見」をテーマに、フォトコンテストを開催。受賞作品を式典や総合市民会館で展示。



二階堂和美さんを囲む音楽の集い(エスポワール大竹)
大竹市出身の歌手・二階堂和美さんのコンサートを開催。大竹の特産品を使った料理の提供。



大竹市の未来を担う子どもたちへの環境学習事業(戸田工業株式会社)
玖波小学校5年生の児童に環境学習。(工場見学、グリーンカーテン制作など)



市制60周年巨石(ストーン)アート事業(大竹市暴力監視追放協議会)
巨石アートの写真を使った60周年のPRポスター、新しい巨石アートの制作など。



巨石(ストーン)アートをめぐるノルディック・ウオーキングおたけ(大竹部会)
巨石アートを見ながら市内を巡る、ノルディック・ウオーキング大会を開催。



市制60周年を「日曜玖波マルシェ」でお祝いしよう!(玖波まちづくり振興会)
玖波公民館とのコラボイベント。スタンプラリーで地元のお店を紹介。子どもから大人まで楽しめるイベントの開催など。



大竹和紙小市(PiNECoNeS)
西念寺を会場に、市内外の作家による和紙作品の展示・販売、歴史お散歩ツアーを実施。



だからこのまちが好き(地域ジンまちカフェプロジェクト)
玖波のまちを舞台にしたイベント(古い民家を使ったカフェ、昔の写真パネルの展示など)の開催。



三宅由利子&大竹ジャズダンス同好会によるコラボパフォーマンス(大竹ジャズダンス同好会)
大竹市出身のダンサー・三宅由利子さんと同好会の子どもたちによるダンスイベントの開催。小方学園歌に振付けをし、体育祭で全中学生が披露。



青少年育成文化交流活動(大竹青年会議所)
子どもたちと大竹和紙の行灯作り(コウゾ精製、紙すき体験など全7回)



高齢者交通安全事業(大竹高齢者交通安全モデル地区活動推進協議会)
市内各所で交通安全講習会や啓発チラシの配布。



Let's get together!